



ナイトイン、ナイトイン、ナイトイン、

「ねえ、泣いていい？」と、ふゆが言った。

「だめだ。」と、僕は言う。

泣いちゃ、だめだ。泣いたら、涙が溢れてしまう。零れ落ちてしまう。ふゆの痩せた頬を伝って、しかし柔らかい頬を伝って、あごに辿り着いてしまう。瘦身の割りに肉で膨らんだふゆのあごが濡れるのを見るのは、やだ。しかし、濡れる。落ちる。僕はその涙を中指と人差し指ですくって、舐めた。味がしない。ふゆの体液はいつも味がしない。

でもそれは昔の話だ。世界が終わる、前の話だ。

もう、ふゆの体液は味がする。肉が腐ったみたいな味だ。僕はふゆのまたぐらに頭を突っ込みながら、そう思う。ふゆのまたぐらの間は燃えてしまうみたいに熱い。海の底みたいだ。海の底で横たわって沈むみたいだ。

僕は海の底に横たわっている。真っ青で黄色い海。魚がいる。同じように横たわっていて、時折僕を見つめる。くるりと光る眼球。揺らがない視線。でも、視線ではないのかもしれない。僕を見つめているのではないのかもしれない。ただ、僕の目の前で眼球を光らせているだけなのかもしれない。

ふゆ、みたいに。

ふゆはまたぐらに頭を突っ込む僕を、見ない。見る事が出来ない。ふゆは眼球を光らせることは出来ても何かを見ることは出来ない。白衣を着ていて髭を生やしたお医者さんがそう言っていた。ゴミ袋みたいにお腹の膨らんだお医者。町の底を流れる川みたいに真っ黒い眼球を持ったお医者。お医者のお白は薄汚れていて、ところどころ黄色い染みが浮いていた。染みは、まるで染みのようだ。僕のはらわたの底で染み広がる思い出のようだ。僕とふゆの思い出。幾らでも広がってゆく思い出。増え続ける思い出。

僕はふゆのまたぐらの奥を舐め続けていた。舐めすぎたせいで、血が出た。僕の舌が削れて、ふゆの赤い皮膚が破けた。僕とふゆの血液が交わった。一緒くたになった。僕は「一緒くた」という言葉が好きだ。特に「くた」のところが好きだ。くたくたして、かわいらしいかわいらしい感じがするから。でも「くたびれた」はあまり好きじゃない。特に「びれた」のところが好きじゃない。爛れたふゆの肉に似てるから。

僕の血液とふゆの血液と体液が口の中で一緒くたになる。

なっている。

錆びた鉄の味と腐った肉が混ざった味の中に、微かにブドウ糖の味を区別する。僕はブドウ糖の塊をよく齧っているのを知っている。ブドウ糖の塊は、いつも齧っている。祭子さんがくれる。僕が生きるのに必要なものだ。いつも祭子さんから貰った茶色い紙袋から取り出して、齧っている。ふゆにも齧らせている。ブドウ糖の塊はつるりとした質感をしている。僕の枯れた指先はその感触を心地よく思う。だから指先で摘んで、ふゆの唇に這わす。そのとき、ふゆの唇は少し震えるような気がする。そしてそのまま口の中に突っ込んで、舌をなぞる。ふゆの濡れている舌。真っ赤に熟れた舌。そして大人にしてはひどく小さい、魔歯みたいに儂げな歯。僕はその上にブドウ糖を乗せる。どちらが本当の歯かわからなくなる。だからふゆの頭部とあごを掴み、噛み

砕かせる。砕いてしまえば、わからなくなくなる。

そのとき、ふゆは何も言わない。表情も変えない。呻きすらもしない。何も、思ってすらもないのかもしれない。

ふゆは死んでしまったのではないか。食物を摂取し、排泄し、体液を循環させるだけの機能になってしまったのではないか。

僕はそうってお医者に詰め寄ったことがある。お医者は、そうではないのだと言う。深く奥底に沈むようにして、生きているのだと、言う。ならば、そうなのならば、それは継続されるべきことだ、と僕は考える。ふゆは生き続けるべきだ。なぜならふゆはそれを望んでいるからだ。僕と共に生き続けることを望んでいるからだ。

「ねえ」と、ふゆは言ったからだ。

「ねえ、はる。ずっといっしょだよ。」と、言ったからだ。

だから僕はブドウ糖を与え続ける。ふゆの薄くなってしまった頭髪を押しえつけ、肉の付いたあごを掴み、噛み砕かせ続ける。僕が生きるのに必要なものだ。

ふゆのまたぐらの肉は柔らかい。僕は口の中で腐った肉の味が混じりあうのを感じながら、それに吸い込まれるのだと思う。暖かく、柔らかい肉。すべすべして、赤い肉。僕は破れた舌で何度も何度も舐める。痛みが、ある。痛みは舌の上を登って眼球の裏にまで届く。僕の指はふゆの太ももを掴んでいる。ふゆの太ももは脂肪も筋肉も随分薄くなってしまっている。固い骨が指の上に残る。感覚だ。感覚が残る。痛みがある。

僕は顔をまたぐらから離し、ふゆの顔を見た。ふゆの顔は海の底で横たわる魚に似ていた。丸い目が離れていて、薄い唇がわずかに開いている。そこから空気が少しだけ排出されるのが見えるような気がした。深海にいる魚のように、泡がふよふよと浮いていくのだと思った。

ふゆが座る椅子の傍ら、窓の外で星間トンネルの誘導灯が夜空に輝いていた。黄色い輪切りの円柱のようなそれに、小さな船が吸い込まれていくのが見えた。

「ほら、ふゆ。」と、僕は言う。

「船が行くよ。」

ふゆは何も言わない。

「また誰か旅立っていくんだ。どこに行くんだらうね。火星かな。ねえ、いつか二人で火星に帰らうね。僕はまだ火星には行ったことがないんだ。火の降る草原、そしてその草原を越えた先にある燃え上がる湖、そこに住む大なまず、誰もが飲むという名産赤酒、どれもふゆから聞いただけだ。一緒に行くの、たのしみだな。」

僕はふゆの目を覗き込む。黄色く光っている。でも、ふゆは何も言わない。僕はふゆの痩せた小指を手繰り、自分の小指と結んだ。

「ねえ、ふゆ。約束をしよう。」

と、僕は何度したかわからない約束を、もう一度した。ふゆの小指は少し汗ばんでいた。僕は口の端から血が垂れてきたのを感じたので、小指を解き、手の甲で拭った。乾いた手の甲に赤い線が残った。血の跡は夜が空ける前には乾いて、剥がれ落ちた。